基督教主義を以って徳育の基本と為せり

― 同志社大学とキリスト教主義 ―

同志社大学 キリスト教文化センター

キリスト教に基づいた「良心」に従って生き、
その「良心」の中で「自由」を行使する

創立者　新島襄

同志社教育のバックボーンとなる キリスト教主義

同志社大学では「良心を手腕に運用する人物の養成」という建学の精神にもとづいて「良心教育」を展開しています。そして建学の精神を実現するための教育理念として「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」を掲げています。ここまでは大学案内やホームページにも明記されていて、ご存知の方も多いでしょう。しかしこの三つの教育理念が並び立つものなのではなく、キリスト教主義が、自由主義・国際主義を基底で支えるものであるということは意外に知られていません。

本学の創立者、新島襄は、明治十年代中葉の演説草稿の中で、「人を愛するは、一国に限らず世界の人をも人と見なしてこれを愛せば、決して区域の狭き者にあらず」（同志社編『新島襄　教育宗教論集』岩波書店 二〇一〇年 二九八ページ）と述べています。このように世界宗教であるキリスト教に裏打ちされた「愛人主義」、すなわち一国にとどまらず、人種、民族、国家を超えて、同じ人間同士として愛し合い、国家から独立した民間の力で世界に貢献することが、同志社の自由主義、国際主義なのです。

みなさんが、学生生活を通して同志社大学のキリスト教主義について考え、良心を育み、卒業後、社会のそれぞれの場でその力を発揮することができるよう願っています。

キリスト教文化センター所長

同志社の「キリスト教主義」はこうして生まれた

ラットランド・アピール
—新島、熱き志を語る

同志社の真の出発点は、「ラットランド・アピール」にあります。1874年10月9日、米国ヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開かれた、アメリカン・ボード（伝道団体）の年次大会での出来事でした。留学を終えて宣教師として帰国する直前、新島襄は、約3,000人の会衆の前で、キリスト教主義学校を日本に設立するという志を熱く語り始めたのです。

日本の同胞に思いを馳せながら、キリスト教主義学校設立の必要性を力説し、涙ながらに懇願する新島の真摯な姿に感銘を受けた人々から次々と寄付の申し出があり、約5,000ドルの寄付の約束を得ました。それが同志社の礎となったのです。その中には、帰りの汽車賃の2ドルを差し出した貧しい老農夫も含まれていました。同志社は、新島の志に賛同したキリスト教徒の人々の善意から生まれたのです。

同志社大学設立の旨意（しい）
—「基督教主義を以って徳育の基本と為せり」

「同志社大学設立の旨意」（1888）

ラットランドでの演説から約1年後の1875年11月29日、新島は京都に同志社英学校を創立しました。さらに7年後には、新たに大学を設置するための運動を開始しました。キリスト教主義大学設立は、新島の宿志だったのです。当時は大学と言えば官立の東京大学があるのみでしたから、私立の大学、しかもキリスト教主義の大学を設立するための資金や支援者を得るのは容易なことではありませんでした。

より多くの人々の支援を得るために作成されたのが、「同志社大学設立の旨意」です。そこには新島の教育方針が集約されています。知識偏重の教育ではなく、徳性を磨き、品性を高め、精神を正しくし、良心を手腕とする人物を養成することを目標とし、そのためにキリスト教主義を徳育の基本とする、と明記されています。

「同志社大学設立の旨意」のページ ➡
https://www.doshisha.ac.jp/information/history/policy.html

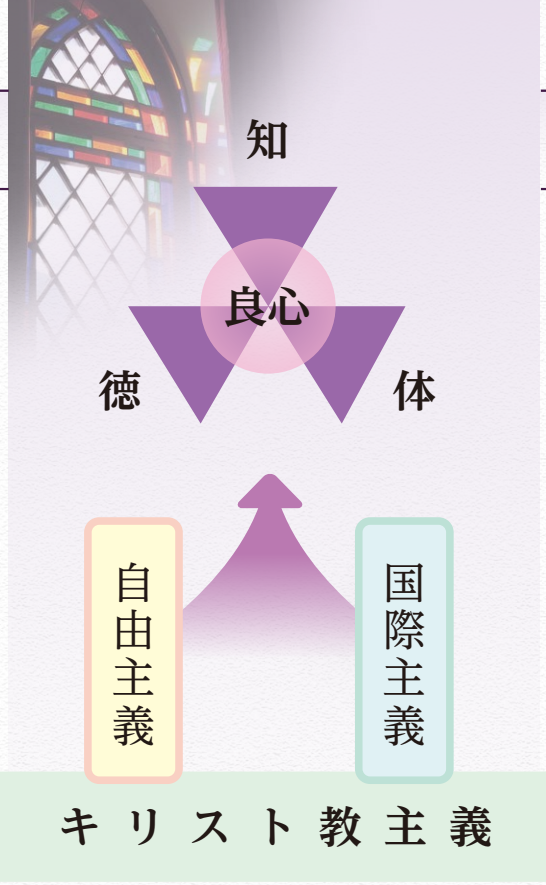
キリスト教主義×自由主義

同志社はあくまでも自由な学園です。その淵源は創立者にあります。自由を求めて脱国（密出国）した新島襄は、さいわいにもアメリカの自由な風土で自由人になって帰国し、京都に自由な学園を創立しました。

彼自身、「我が大学の空気は自由なり」と断言、自負しています。「自治自由の春風」が吹く学園が彼の理想でした。その自由は、聖書から来ています。「真理はあなたたちを自由にする」と新約聖書（「ヨハネによる福音書」8章32節）にあるとおりです。この聖句はラテン語で今出川キャンパスの明徳館ならびに京田辺キャンパスの知真館1号館の壁面に掲げられています。

ここで学ぶ学生一人ひとりが真理と自由な校風に触れて、自由人になるというのが、本学の願いです。

"VERITAS LIBERABIT VOS"
〔真理はあなたたちを自由にする〕
明徳館（今出川キャンパス）



※同志社のキリスト教はプロテスタントの会衆派（Congregationalism）の伝統を受け継いでいます。

キリスト教主義×国際主義

新島襄は、アメリカで大勢の信徒たちから種々の援助を受けて、８年余も留学生活を経験することができました。正規に大学を卒業した日本人第一号です。そうした留学生・国際人が、同僚のアメリカ人宣教師たちと京都に創設した学園が同志社です。

そのため、早くから留学も盛んです。最初の入学生８名のうち２名が、1880年代初頭にアメリカ留学し、帰国後に帝国大学（東京大学）教授になりました。最初の卒業生15名中、５名も留学、それも全員イェール大学です。新島の死後、彼らは次々と新島を継ぐ同志社校長として、恩師の遺志の実現に尽力しました。

校舎にしても、ミッションの援助で早くからレンガ造りの洋館（チャペルを始め、現在５棟が重要文化財）が建てられたり、新島の母校（アーモスト大学）から同志社アーモスト館が贈られたりしました。それらは、いまも同志社国際主義のシンボルです。

アーモスト館〔登録有形文化財〕（今出川キャンパス）

同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義

同志社の支柱である自由主義と国際主義を基底で支えるものは、キリスト教主義です。
これは同志社独自の校風を形成する最大の要素となっています。
新島は、学生一人ひとりを、神がつくられた「人格」として最大限に尊重しました。
以来、「人ひとりは大切なり」が大事な校風として守られてきました。
その結果、聖書にあるように、隣人（となりびと）を尊重し、他者に奉仕する「地の塩、世の光」とも言うべき
個性豊かな多くの卒業生を、いろいろな分野へ開拓者として送りこんできました。
そうした営みは、これからも続きます。

← 良心教育と教育理念
https://www.doshisha.ac.jp/information/history/educational_ideal.html

同志社徽章：制定以来、知・徳・体の三位一体をめざす →
同志社の教育理念をあらわすものと解釈されています。
https://www.doshisha.ac.jp/information/history/emblem.html

良心を手腕に活躍しています!

水谷嘉浩 さん　Jパックス株式会社代表取締役　[1993年 文学部社会学科社会福祉学専攻卒業]

避難所の景色を変える!

平成23年3月11日、東日本大震災が発生しました。私は東京に出張中で、凄まじい揺れを経験したのですが、テレビで津波の映像を見て、「これは大変なことになってしまった。自分に何ができるだろうか?」そう考える日が続きました。ある時、多くの被災者が避難所で寒さが原因で亡くなっていることを知りました。どうして安全なはずの避難所で人が亡くなるのか?段ボール製品の製造販売を生業にしている私は、「もしかしたら暖かい段ボールで寝床を作れば凍死を防げるかもしれない」と考え、急遽段ボールでベッドを試作してTwitterに写真を投稿したところ、石巻赤十字病院の医師につながりました。医師は、避難所ではベッドが必要だと言うので、とにかくトラック満載の段ボールベッドを作り石巻に向けて出発。雑魚寝の避難所では寒さだけではなくエコノミークラス症候群などの健康被害が多発しているようで、ストップザ雑魚寝!を合言葉にベッドを普及させる活動を開始しました。しかし、ほとんどの避難所では無償提供にもかかわらず段ボールベッドの受け入れは拒否されたのです。理由は、行政において避難所にベッドを導入する仕組みが無いからでした。そこで、その仕組みを作ろうと考え、あらかじめ行政と防災協定を締結する事を考えました。また、個人的な活動では普及も限定的だと考え、段ボールベッドの設計図を業界団体に無償提供して、広く協力を仰ぎました。現在では、業界全体で9割以上の都道府県と防災協定を締結しています。しかし、避難所の課題は雑魚寝だけではありません。トイレや食事などの質に課題も多く、まだまだ多くの避難者が体調を崩したり亡くなったりしています。そこで、避難所の環境を改善して災害関連死を防ぐ事を目的に、避難所・避難生活学会を設立。現在は、国や行政に対して避難所の環境改善を訴えたり、災害発生時には被災地に入り避難所の環境整備に取り組んでいます。日本の避難所の景色を雑魚寝からベッドに変える。日本から災害関連死を撲滅することができるまで続けたいと思っています。

澤田果歩 さん　[神学研究科前期課程1年次生（取材当時）]

自分でも無意識の内に、相手の属性によってその人のことを判断してしまうことがあります。年齢、性別、学歴、仕事、病気や障害、社会的立場、などなど。私たちが今生きる社会は、自分と異なる属性を持つ人と繋がる機会は少なく、その人たちがどのように生きているのかを知る機会もない、「分けられた」社会だと感じます。
私は学生生活を通して、一般社団法人京都わかくさねっと（通称：わかくさ）という団体でボランティア活動をしてきました。わかくさでは、10代から20代の女性を主な対象とした居場所づくりを行っています。居場所を訪れる人の背景・属性は様々ですが、その中には家庭や学校での辛い経験を持っていたり、何かしらの「生きづらさ」を抱える人もいます。でもそれは決して特別なことではありません。私にも悩みや「生きづらさ」がありますし、これを読んでいる人の中にもきっと、色々なものを抱えている人がいると思います。

わかくさの開く居場所では、それぞれが抱えているものを専門的に解決することはできません。話したくないことを積極的に聞き出すこともしません。することは、ただ一緒に何でもない話をしたり、ゲームをしたり、ご飯を食べたりして時間を過ごすことくらいです。でも、たったそれだけのことが無料でできる安心・安全な場所は、社会の中には少ないのです。

わかくさでは、何かをしてあげる/してもらうという関係ではなく、相手をラベリングせず、お互いに1人の人間として対等にあることを大切にしています。生産性が求められる能力主義の社会の中で、自分の偏見や思い込みから自由になって他者と向き合えた時、はじめて私たちは誰かの隣人になることができるのではないでしょうか。そんな風に、誰かの隣りに寄り添うことのできる人でありたいと思います。

多彩なプログラムに参加し、同志社の「キリスト教主義」に触れてみよう

[学生体験レポート]

チャペル・アワー

チャペル・アワー ➡
https://www.christian-center.jp/chapelhour/index.html

古河桃名 さん [心理学部2年次生（取材当時）]

チャペル・アワーとは今出川・京田辺両校地で週に3回行われるキリスト教の礼拝です。オルガンの演奏を聴き、語られる聖書のお話に耳を傾け、皆で祈りと讃美歌に心を合わせます。時には学生聖歌隊や合唱団による合唱、ゴスペル・ソングなどを通してキリスト教音楽に親しみながら、心休まるひと時を過ごす日もあります。

チャペル・アワーでは教会の牧師をはじめとして、学内外から様々な方をお招きして聖書やキリスト教主義、同志社の建学の精神に関するお話を伺います。時には学生がお話しすることもあります。私は2022年1月にチャペル・アワーでお話を担当しました。そこでは次のように話しました。

「自分はこうあるべき」という思いと、「本当はこうしたいのに」という思いの2つが争うようにして、片方がもう片方を押し込み、生きづらい、苦しい思いをする人が多くおられることと思います。その当時、コロナ禍が収まらない中始まった慣れない大学生活で、毎日勉強に追われ、私自身がそのような日々を過ごしておりました。しかしそのような時にこそ、神さまは私たちの心を訪ね、礼拝堂へと招いてくださっているのだと気がついたのです。そのことに気づかせてくれたチャペル・アワーに、私は何度も助けられてきました。どんなに目まぐるしい日々であっても、ここに立ち戻って心を落ち着け、聖書の言葉に聞き入っていたい。今でもそのように思わせてくれる大切な拠り所です。

神さまは大学に集うすべての方をチャペル・アワーへと招いてくださっています。スタッフやお話しくださる先生が温かく迎え入れてくださるので、キリスト教に全く馴染みがない方も気軽に立ち寄り、ぜひ聖書の言葉に触れていただきたいのです。ここで聴いたことや歌った讃美歌の一節をふと思い出した時、その言葉に勇気づけられたり、励まされたりするでしょう。

クリスマスイベント

クリスマスイベント ➡
https://www.christian-center.jp/xmas/index.html

原啓人 さん [神学部4年次生（取材当時）]

同志社大学はキリスト教主義を掲げている大学であり、学内ではキリスト教に関係したイベントも開催されています。特に11月～12月に行われるクリスマスイベントのうち、11月末の今出川・京田辺クリスマス・イルミネーション点灯式は最も盛況するものです。

今出川校地では、キャンパス内のサンクタスコートと呼ばれる敷地にあるヒマラヤスギの大樹に電飾が施されます。少し暗くなった17時すぎから、サンクタスコートの周辺に学生・教職員・地域の方々など様々な人が集まり、点灯式が開始されます。同志社学生聖歌隊による合唱奉仕と共に、クリスマスにちなんだ聖書箇所が読まれ、点灯の場面になると、司式者による「5、4、3、2、1」のカウントダウンが始まり（コロナ禍以前は、参加者の皆さんも大声でカウントダウンしてくれました）「点灯!」の掛け声と共に、その煌びやかな光が発されます。

京田辺校地では、2019年に植えられたヒマラヤスギのもとで同様の行事が行われます。広々とした京田辺キャンパスの、正門を通ってすぐのローム記念館の前で開催されるため、地域の方々などの参加も多いです。こぢんまりとしたヒマラヤスギは、今出川校地の巨大なツリーとは対比的に、馴染みやすく人々の憩いの場を提供している印象を受けます。

点灯式に参加すると、理工学部の皆さんが作ってくださった、竹で出来た燭台が渡されます。竹筒の中でほのかに光る炎を見ながら、ツリーが点灯している様子を見ると、ああ今年もクリスマスがやってくるのだな、と実感します。ツリーは点灯式後12月25日まで点灯していますので、ぜひご覧いただき、共にクリスマスの訪れを感じていただければと思います。

〈キリスト教文化センターで行っている主なクリスマスのイベント〉
★ クリスマス・イルミネーション点灯式　11月下旬～12月上旬（今出川、京田辺）
★ クリスマス・イブ礼拝　12月24日頃　同志社礼拝堂（今出川）、
同志社京田辺会堂言館（KOTOBA-KAN）礼拝堂（京田辺）

その他のプログラム
◆Doshisha Spirit Tour（熊本キャンプ、東京・安中キャンプ）
◆Doshisha Spirit Week　◆メディテーション・アワー
◆オープン・プログラム、公開講演会　など

その他のプログラム ➡
https://www.christian-center.jp/

《キャンパス内にある礼拝堂》

同志社礼拝堂（重要文化財／今出川）

1886年竣工。前年の定礎式で、新島は「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ、又タ精神トナル者ナレバナリ」と言っています。日本のプロテスタントの煉瓦造りの礼拝堂では、最古。アメリカン・ゴシック調の鉄板葺。急勾配の切妻屋根が美しく、内部はプロテスタントの会堂らしい簡素な造りで、窓は木枠組に色ガラスを入れてステンドグラスを模しています。現在は、礼拝、講演会、卒業生の結婚式などに利用されています。

クラーク・チャペル（クラーク記念館：重要文化財／今出川）

1893年竣工。アメリカのB.W.クラーク夫妻から、亡くなった子息の名前を冠するなどの条件のもと、1万ドルの寄付がよせられました。ドイツのネオ・ゴシックを基調とする重厚な建物で、天を突く尖塔は、同志社のシンボル的存在です。老朽化のため2003～2007年にかけて大規模修復工事を行った際に、2つに仕切られていた教室を本来の姿へ戻しました。チャペルは礼拝、講演会、結婚式などに利用されています。

神学館礼拝堂（今出川）

1963年に竣工した神学館の3階に位置しています。入口の壁面には、ヘブライ語で創世記第一章一～五節が刻まれています。チャペルの天井から茨の冠が吊るされており、正面にある田中忠雄によるステンドグラスから柔らかい光が差し込んできます。右側の壁にある、田中の「聖霊降臨」を描いた油絵の人々が、ステンドグラスのキリスト像を見上げているように見えます。

同志社京田辺会堂言館（KOTOBA-KAN）礼拝堂（京田辺）

2015年に竣工したこの建物はガラスの大開口で外部への開放したデザインのため礼拝堂の様子を間近に見ることができる親しみのある空間となっています。同志社京田辺会堂は礼拝堂のある言館（KOTOBA-KAN）、ラウンジ等をもつ光館（HIKARI-KAN）で構成されています。ラウンジでは同志社の歴史と建学の精神を知ることができる資料を展示しています。

同志社大学キリスト教文化センター

https://www.christian-center.jp/

今出川校地　クラーク記念館 1 階
TEL：075-251-3320
E-mail：ji-kirib@mail.doshisha.ac.jp

京田辺校地　同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）南棟
TEL：0774-65-7370
E-mail：jt-kirib@mail.doshisha.ac.jp

2023年3月1日